HELLO

GOODBYE

2007

雨が降る。 ぽつりぽつり、と。 ほろりほろり、と。

雨音

　雨でくすんだ景色に色が咲く。
　雨に濡れ映える紫陽花。色とりどりの傘。桃色の長靴。
　雨宿りの為に入った喫茶店の窓側の席、濡れてしまった上着を横にぼんやりと外を眺めていた私は、軽快な足取りで歩く桃色の長靴に目を奪われていた。
　その足取りが止まり、丸みを帯びた爪先がゆっくりとこちらを向いた。視角では捉えていたが、ぼんやりしていた脳に伝わるのは遅く、地面に映える桃色の影を見てようやく「ああ、止まったな」と気付く。「何故止まったのだろう」と思い、そろそろと視線を上げると、傘をひょいと持ち上げ、にこりと笑う少女と目が合った。
　私は思わず腰を浮かせ、弾みでほとんど手をつけていなかったコーヒーを溢してしまう。大慌てで紙ナプキンを押し付けていると、店員がやって来て世話を焼いてくれた。
「どうも、申し訳ない」
　そのまま逃げる様に上着を掴み、会計を済ませて店を出た。
　雨に濡れるところを桃色の長靴がそろそろとやって来て、傘を差し出してくれる。二人で入るには小さな、可愛らしい傘だった。
「ありがとう、雨音」
　礼を言うと、少女――雨音はにこりと笑った。笑って、茶色く染みのついた私のシャツを指さす。
「ああ、さっき慌ててコーヒーを溢してしまって」
　そういえば雨音にも見られていたのだなと思い出して、コーヒーの染みと気恥ずかしさを誤魔化す様に上着をはおった。
　お互い濡れない様に、気を使いながら並んで歩く。二人の身長差が頭一つ分はあるので、雨音は自然傘を持ち上げなければならなかった。
「持とうか」
　傘に手を伸ばすと、雨音は一歩下がり眉間に皺を寄せ、口をすぼめて拒絶の意を表した。傘の位置をずらされ、私は雨空に晒されてしまう。
「分かった、傘には触らないから」
　言うと、雨音は安心したように笑って、また傘を差し向けてくれた。そうして再び歩き出しながら、私は雨音に話かける。家族の近況、最近観た映画のこと、雨音に乞われて飼った犬が死んでしまったこと。
「雨音？」
　可愛がっていた犬が死んだというのに、笑ったまま表情を変えない雨音を私は疑問に思う。
「悲しくはない？」

尋ねると、雨音は考える素振りを見せてから、やはりまた笑った。
「そうか」
雨音には聞こえてはいない様だった。私が何を尋ねても、雨音はただにこりと笑うだけで言葉を返すことはなく、反応もどこかちぐはぐとしていて要領を得ない。
同じ傘で雨を凌いでいるのに会話も成り立たない私達は、まるで違う世界の住人のようだった。話を止めてしまったら雨音が消えてしまうのではないかと、心では焦りを覚えながらも、ゆるりと歩き、ぽつりぽつりと言葉を舌に乗せた。それはまるで、ほろりほろりと口から零れ落ちる懺悔の様だった。
「ああ･･･」
唐突に、雨の終わる場所に出た。その僥倖に振り返ると、雨音は数歩後ろで立ち止まり空を見上げていた。
数歩前に立つ私は晴れた空の下に、雨音は未だじめじめとした雨空の下に。
たった数歩分の手を伸せば触れられる距離なのに、二人の間には大きな隔たりが出来ていた。いや、話すことも触れることも出来ない私達には、初めから大きな隔たりがあったではないか。
「雨音」
名を呼ぶと、雨音は笑みを浮かべつつもどこか悲しそうな顔で私を見た。決して聞こえはしない言葉を舌に乗せ、にこりと笑う。
ああ行ってしまうのだな、と私は思う。
光が徐々に徐々に、雨空を浸食して行く。暗い雲を押し退け完全な晴れ空となったときには、もう雨音の姿はどこにもなかった。桃色の長靴を履いて、にこりと笑う雨音の姿が私の脳裏に焼きついていた。

ーーさようなら。

もう二度とありはしない邂逅に、私は涙した。
ほろりほろり、と。

【終】
（2006.8.25）

されど犬走る

犬が死ぬ夢を見て、泣きそうになった。

けれど、犬は今日も変わらず歩いている。私の前を何食わぬ顔で歩いている。
私が散歩に付き合っているのに、まるで犬が先導して歩いるかのように、ちょっとだけ得意そうにも見える。

時折振り向いては、不満そうにじっと私を見る。
私は歩くのが遅いから、きっと、遅いよとでも思っているのだろう。
もっと速く歩けないのかとでも思っているのだろう。
聞こえはしないけれど、瞳がそう言っている気がする。

また犬が死ぬ夢を見て、泣きそうになった。
その夜は、ずっと犬の遠吠えが止まなかった。
何だろうと訝しんでいた私は、後になってから遠吠えの理由を知った。
弟犬が死んだのだ。
あれは、犬なりの哀悼の声だったのだろうか。行くな、と泣いていたのだろうか。
分かりはしないけれど、そうなのかもしれないと思っている。
だって犬は、人が知らせを持ってくる前に知っていたのだ。彼の弟の死を。

途端に犬は、年老いて行った。
散歩の途中で良く会っていた他の兄弟達の姿も見られなくなった。
犬は覚束無い足で私の前を歩き、それでも時折不満そうに振り返る。
また、遅いとでも思っているのだろうか。
だが、試しに走ってみても犬は一向に走ろうとしない。
ずるずると引きずられるだけだ。犬は、年老いた。

夜、遠吠えが響く。また、犬が死んだのだ。
毛並みの綺麗な雌犬だった。彼女は犬の子供を生んだ。
犬に婚姻があるのかは知らないが、彼女はいわば犬のお嫁さんだった。
お嫁さんも、死んでしまった。

私は、犬が死ぬ夢を見なくなった。
変わりに、違う夢を見る。走る犬の夢だ。
首輪から解き放たれた犬が野原を走る、ドックフードのＣＭのような夢だ。

その中に、私の犬の姿は無い。
されど犬は走る。夢の中で、風を切って走る。
私の犬は、夢の外で、引きずられながら歩く。

【終】

（2006.10.25）

東京

東京出身ではない私は、東京の安アパート六畳一間の狭い部屋で、膝を抱えて「東京」という歌を聴いている。
「『東京』って歌はさ、東京出身じゃない人が作るよね」
そう言った人が故郷に居た。
そういえばそうかもしれないなと、今更だけど故郷の人に相槌を打つ。
一人暮らしだと、ただの独り言だけでなく、過去現在未来も友人知人他人問わず妄想じみた相手へ向けた独り言が増えるものなのだ。今の相槌もそんなようなもので、故郷に居る人に伝わっているはずがないのは分かっている。私にはテレパシーなんてないのだから。ただの自己満足で、ただ淋しさを紛らわす手段に過ぎない。より一層、淋しさが増すような気もするけれど。

外は雨だ。
出掛けるのも面倒くさいから、膝を抱えて「東京」という歌を聴くくらいしかすることがない。
「じゃあ『東京』って歌でも作ってみたら」
故郷の人が、そんな風に言ったような気がしたので、私は「それは良い考えだね」と頷く。これも、淋しい独り言だ。けれど存外良い考えじゃないかと、もう一度声に出して言ってみる。故郷の人の妄想ではない、私自身の言葉で言ってみる。
「『東京』って歌でも、作ってみようか」

うん、良い考えだ。
故郷の人がそう言った気がしたので、私は紙とペンを取り出して、東京の歌を作る。

【終】

（2006.10.31）

駅のホーム。二人掛けのベンチ。
左にＬ、右にＲ。いつも二人仲良く腰掛けて電車を待つが、二人の間に会話はない。
電車が来たらＲが知らせてくれるし、信号が赤から青に変わったときもＲが教えてくれる。
Ｒが居るから大丈夫。Ｒが居るから平気。
Ｒが居るから、Ｌは世界から取り残されたりはしない。

沈黙のセオリー

右から聴こえてくるメロディと、左から聴こえてくるメロディ。
まるで呼応し合うように交互に奏でられる旋律。
「会話みたい」
「は？」
ヘッドホンを耳に当てたまま呟いたら、思いがけず返答があった。Ｌは、そういえば１人じゃなかったんだと思い出し、ヘッドホンをずらして顔を上げる。Ｌよりも少しだけ背の高いＲと真正面から顔を付き合わせることになり、まるで見詰め合っているかのようになった。
「あ、えーと」
少し気まずい雰囲気の中、Ｒが先に視線をずらした。
ＬはＲに「ごめんね」と謝る。
「何が？」
ヘッドホンを戻そうとした所に尋ねられ、Ｌは手を止め答える。
「独り言」
「あ、さっきの。独り言だったのか」
「うん」
「そっか」
「うん」
「ごめん」
謝ったら謝り返され、Ｌは再びヘッドホンを戻そうとした手を止める。
「何が？」
Ｌが聞き返すと、Ｒはヘッドホンを指差す。
「や、邪魔しちゃったみたいだから」
確かに、ちょうど良いところではあった。右で奏でられたメロディと、左で奏でられたメロディがいつしか重なり合って一つの旋律を奏で出す、ちょうどその時にＬはヘッドホンを外してしまったのだ。Ｒのたった一言の疑問符に答えてしまったがために。
「ああ･･･うん」
曖昧に答えながら、Ｌはずらしたままのヘッドホンに意識を傾ける。会話みたいだと思った旋律も、重なり合ってさながら共に笑い合って居るかの様な旋律も、聴かれることなくただ流れて

いる。右から左から、ただ流れて行くだけというのは勿体無い気がして、Ｌは停止ボタンを押してヘッドホンを外した。
　途切れた音楽。沈黙しているヘッドホン。
　途切れた会話。沈黙しているＬとＲ。
　いつもそうだ。いつも、二人の間には沈黙が流れている。
　Ｌはいつも音楽を聴いているけれど、Ｒはそうじゃない。Ｒは１人でひたすら沈黙を守っているのだ。Ｌの好きなように、Ｌの邪魔をしないように。たった１人で。
「良いよ」
「え？」
「気にしてないから」
「･･･そう？」
　Ｒは、Ｌが外したヘッドホンに何やら不安そうな眼差しを向けた。
「邪魔されたなんて思ってないよ。本当に」
　Ｌが笑って言っても、Ｒは「なら良いけど･･･」とまだ落ち着かない様子だ。そわそわと所在無げにしている。
　いつもならこんなことはないのに、一体どうしたことだろう。
　不思議に思っているＬを他所に、近くの踏切りで警報機が鳴り始める。
「で、電車が来るよ」
Ｒが慌しく立ち上がった。Ｌは外したヘッドホンを鞄に仕舞い、Ｒの隣に立った。

　駅のホーム。背後には二人掛けのベンチ。
　右にＲ、左にＬ。二人仲良く並んで電車を待つ。
　いつもと同じような風景。いつもと変わらないはずの日常。
　けれど今日は、Ｌがヘッドホンを外した。二人の間に会話があった。
　Ｌが隣に居る、その時の沈黙がＲには心地よかったのに。Ｌがヘッドホンを外したら、心地よかったはずの沈黙はどこかへ行ってしまった。またヘッドホンで音楽を聴き始めてくれたら良いのに、とＲは願うが、Ｌはもうそのつもりはない様だ。
「たまには周りの音を聴くのも良いもんだね」
　人の気も知らないでＬはＲに笑顔を向けた。
　その笑顔に、Ｒは居心地の悪さを覚えずにはいられなかった。

【終】
（2006.12.18）

沈む。沈む。どこまでも沈んで行く。
胸の真ん中あたりにどろりとした感情がどろりと湧いて、
そのまま身体の奥の奥まで沈んで行く。
同時に、身体までもが沈んでしまいそうだ。
床も地面も突き破って、どこまでもどこまでも。
その末に辿り着くのは何処だろう。
恐らくは、何処へも辿り着きはしないだろう。
帰ってくる。返ってくる。
此処に。この胸にどろりと湧いた、この感情の元に。

沈む群青

平静を保てると思っていた。
ただ流れる時に身を漂わせていればいつかは終わる。そう長くかかることでもない。そう難しいことでもない。鹿爪らしい顔をして、少し俯いて、耳を傾けている振りをして、そうしていればやり過ごせると思っていたのだ。全てが終わるまで、平静を保ったままでいられると思っていたのだ。
けれど。いつの間にか湧いたこの感情が、私から鹿爪らしい顔を奪い、耳を塞ぎ、平静を奪った。否、初めから平静でなど居られなかったのだ。ただただ堪えていたに過ぎなかったのだ。だらしなく崩れてしまうに違いないから鹿爪らしい顔をして、顔を上げれば焼香を上げる人々の姿が目に入ってしまうから俯いて、経文の意味を理解することに腐心して唱えられた経など聴いてはいなかった。そうして耐えていたに過ぎなかったのだ。
現に、一度湧いたこの感情に私は私を失ってしまった。上っ面だけの虚勢を張り巡らしていた自分を失ってしまった。
奥に奥に沈んで浸透した感情が、徐々に徐々に色を帯び、水気を含み、私の眼前を群青に染めた。
――泣いている。
経文に一粒落ちた水滴に、私はようやく自分が泣いていることに気付く。
ずっと堪えていたのは、泣かない為か。悲しまない為か。否、違う。そうではない。この感情は「悲しい」と名の付くものではない。泣いているのは悲しいからでもない。
この感情に、涙している理由に名を付けるとしたら、それは「確認」になるのではないだろうか。私は未だ彼の人を忘れてはいない、その確認のための感情。そのための涙。その為の群青。

内に溢れ返った群青に私は酔いしれる。
そんな己を、私は嫌悪する。
そうしてまた、群青に沈んで行くのだ。どこまでも、どこまでも。
沈んでまた帰ってくる。返ってくる。この、群青の元に。

【終】

（2006.12.18）

神さまが死んだ

　青い空の下、ショベルカーが先端を持ち上げている姿を見て、まるでキリンみたいだと思ったのはもう遠い昔の話だ。

　家の裏手にはまだ葡萄畑が広がっていた。
　その先には大きな牛蛙が棲んでいる小さな池があり、畔には柿の木と小さな鳥居と祠があった。家の窓からも良く見えた橙色の実をつけた木はとても魅力的だったけれど、池に棲みついている牛蛙が怖くて、僕はどうしても近づくことが出来なかった。己を奮い立たせ、葡萄の木の根っこに躓きそうになりながら足音をどすんどすんと鳴らし鼻息荒く近づこうとしたこともあったけれど、池の主の一声ですごすごと退散してしまった。
　それ以降、僕はただの一度も池に近づいたことはなかった。確かに柿の木は魅力的だったけれど、牛蛙が棲む池よりも、葡萄畑と林檎畑に挟まれた小道の先にあるザリガニが棲む沼の方がずっとずっと魅力的だったのだ。
　夏になれば、糸を括りつけただけの粗末な釣竿にスルメをぶら下げ、ザリガニ釣りに走った。途中、猫と遭遇してしまうといつもスルメの取り合いになった。猫にスルメは厳禁だと教えられていたけれど、僕は猫とのスルメ争奪戦に幾度も敗北し、幾度もスルメを取りに家に戻らなければならなかった。その度に僕は「猫にスルメを捕られた」とは言えず「スルメを忘れた」と言い訳していた。だから、僕はいつも「猫と逢いませんように」と思いながら走ったものだった。
　その猫はもう居ない。ザリガニの沼ももうない。
　葡萄畑も林檎畑も全てなぎ倒され更地にされ、そして僕の家も取り壊され更地にされ、変わりに違う場所にやけにりっぱな新しい家が建てられた。今はそこに、両親と呆けた祖母と住んでいる。新しい家に猫が帰って来たことはない。
　そうして僕は今、青空の下で先端を持ち上げているショベルカーを見上げている。
　呆けた祖母を新しい家に残して、両親と三人、更地の真ん中に立っている。

ショベルカーはキリンみたいだ――どうしてそんなふうに思ったのか、今となっては不思議で仕様がない。キリンのように円らな瞳をしているわけでも、優雅な長い首を伸びやかに持ち上げているわけでもない。ショベルカーはショベルカーだ。自然の生態系を壊し、人間の領地を増やしていくためのものだ。現に今、あの池が埋め立てられている。
牛蛙が怖くて近づけなかった葡萄畑の先にある小さな池。ただの一度も近づくことの出来なかったあの池に、僕は、周囲が更地にされ牛蛙が居なくなってようやく来ることが出来たのだった。
僕も、破壊された生態系の上で生きている。それは分かっている。分かっているけれど、今はどうしようもなくあのショベルカーが憎い。葡萄の木も林檎の木も全て取り払われ更地となってしまったこの景色が悲しい。
牛蛙は、ザリガニは、猫は、何処へ行った。
葡萄の木は、林檎の木は、何処へ行った。
どうして消えた。どうして。どうして。
ショベルカーが、もう何度目になるか分からない先端を持ち上げたところで、僕は耐え切れなくなった。
もう見ていられない。見ていたくない。
「先に帰ってる」
池が埋め立てられて行くのを呆けたように見ていた両親が、その顔をこちらに向けた。
「どうして」
それには答えず、僕はショベルカーに背を向けた。
更地を、ショベルカーの音に負けまいと足音を立てて歩き、靴の中まで土まみれになって家を目指す。更地を抜ければ目新しいアスファルトの道に面した目新しい家々が建ち並び、新興住宅地をいった風情だ。その中に僕達家族が住む新しい家がある。玄関先まで土色の足跡を付けながら、僕は家へと帰り着き重い扉を開けた。
帰って来たときの習慣で仏間へと向う。襖を開け線香と仏花の香りが微かに漂う仏間に足を踏み入れると、少しだけ落ち着いた。
手を合わせて去ろうとした時、襖を挟んで隣の部屋――祖母の部屋だ――から声がした。身体が悪いわけでもないのに寝たきりで過ごしている祖母は、耄碌してしまっていて僕が孫であることも分からないときているから、普段から接することはほとんどない。わざと避けていると言っても良い。僕は、祖母が僕を僕だと認知してくれないことがひどく辛く、またそんな祖母を見るのも辛い。更地になってしまったこの辺りの風景を目にするときと、同じ辛さが祖母と接する際に感じてしまうのだ。
それでも僕は、祖母の部屋の襖を叩いた。
祖母は、牛蛙の池のことを覚えているだろうか。柿の木や鳥居や祠のことを覚えているだろうか。それらが無くなってしまうことを、どう思っているのだろうか――。
「ばあちゃん？」
そっと襖を開けると、真新しい畳の匂いに混ざって嫌な臭いが鼻に届いた。臭いの元に思い当

たり、僕は顔をしかめた。
「死んだ」
　戸を閉めてしまおうかと思った矢先、祖母が布団の中でそう言った。
「え？」
　いつもの意味の分からない戯言かと思いつつ、今日こそはきっと正気だと期待して尋ね返してしまう。そうして何度も裏切られた末に僕は祖母と接することを止めてしまったのだが、その頃の癖が抜け切っていなかったようだ。
「･･･ばあちゃん？」
　呼びかけてもやはり反応はない。反応はないが、布団が微かに揺れている。次いで聞こえてきた嗚咽に、祖母が泣いているのだと気付いた。
「神様が死んだ」
　そう言って、祖母は布団の中で泣いているのだった。
「死んでしまった」
　祖母の呟きと呼応するように、僕の頭の中で牛蛙の怖ろしげな声が響いた。
　まさか、あの牛蛙が神様だったなんて――ふと閃いたその馬鹿げた思いを掻き消すように、僕は襖を閉めた。

【終】
（2006.12.22）

ハローグッバイ

　朝は「おはよう」
　家を出るときは「いってきます」
　家に帰って来れば「ただいま」
　夜寝る前は「おやすみ」
　どれも当たり前の言葉だけれど、深い意味があるとは思わない？
　「おはよう」も「いってきます」も「ただいま」も「おやすみ」も、次また必ず会えるからこそ言えるんだ。
　言い換えれば、もう会えない相手には言えないことになる。

　ところで、今日あの子に「おはよう」を言ったっけ？ 言ってないかもしれない。
　ということは「いってきます」も「ただいま」も「おやすみ」も言えないわけだ。
　何故なら、「おはよう」から全てが始まるからだ。そうだろう？

　変わりに、言うべき言葉がある。
　「おはよう」よりも「いってきます」よりも「ただいま」よりも「おやすみ」よりも重い重い言葉だ。けれど、呪縛を解き放つ言葉でもある。
　もう此処には居ないあの子へ、言ってやらなきゃ。そうしたら、もう「おはよう」から始める必要もない。
　しばらくは、習慣が習慣でなくなってしまったことに戸惑うかもしれないけれど、これも自分が自分であるための儀式とでも思えばいい。でなきゃ、日常は戻って来やしない。
　だから、さあ、言おう。
　ここで言っても言わなくても、もう二度と「おはよう」からは始めることは出来やしない。
　何故なら、もう二度と、此処にあの子が戻って来ることはないのだから。
　だから、さあ、別れの言葉を。
　たった一言でいい、手向けの言葉を。

「さようなら」

【終】

（2007.3.24）

素晴らしい日々

「はい、いつもの」
　筒状に丸められたそれを差し出すと、叔母は満面の笑みで受け取った。
「ありがとう」
「どういたしまして」
「どれどれ…お、来年は歌川広重カレンダーか。なかなか良い選択だね、褒めてつかわそう」
「ははあ、ありがたき幸せ」
　こうして毎年、叔母の誕生日にカレンダーをプレゼントするのは、私が幼い頃からの習慣だ。
　この習慣の記念すべき１回目は、私がまだ幼稚園の頃だった。描き溜めたお絵描き帳から、厳選した１２枚をカレンダーにした世界にひとつしかない（と叔母が良く言う）それを、叔母にプレゼントしたのが最初だ。
　それから15年間、ほぼ毎年欠かすことなく私は叔母にカレンダーをプレゼントしている。ほぼ、というのは、大学受験の年に模試やらセンター試験やらインフルエンザやらで、叔母の誕生日を失念してしまったからだ。あの時は、年が明けて年度が変わる一月前に、半分ウケ狙い半分嫌がらせでアイドルのスクールカレンダーをあげた。しかし当てが外れ「実は好きなのよ、ありがとう！」と笑顔で言われ、読めない人だなと私は大いに困惑したものだった。
　そんなことがあってから、私はストレートに叔母が喜びそうなものを選ぶようになった。
　半分は、意地もあるのだ。
「今年も例の如く…」
　壁には、例の如く、半年以上前で止まったままのカレンダーが飾られている。
「例の如く…で、ごめんねー」
　悪びれない調子で謝られても、溜め息しか出ない。
「でも今年は頑張ったと思わない？　５月まではちゃんと捲ったんだから」
「カレンダー捲るのに普通頑張るとかないし」
「う」
「今もう１２月だし師走だし年の瀬だし」
「ううう…ごめんなさい」
　叔母は、ことごとく数字に無頓着な人で、それは日付から時間、金額、料理の分量まで徹底している。つまり、ことごとくカレンダーを捲ることが出来ない人なのだ。（ついでに、待ち合わせ時刻には極端に早く来るか遅く来るかのどちらかだし、自分の誕生日も人の誕生日も覚えないし、いきなり大きな買い物はするし、とんでもない料理を作ったりする、正にとんでもない人だ。）
　確かに、５月まで捲ったのは叔母にしては頑張った方だ。今までの最高がアイドルのスクール

カレンダーの９月だったから、４月始まりなのを差し引いても一月の差だ。半分意地で、叔母が好みそうなカレンダーを選び続けた成果はあったのだろうが、所詮、半年も使われなかった憐れなカレンダーであることに変わりはない。それを何件も店をはしごして選び抜いた私の努力が報われた気もしない。
　報われた気はしないが、それでも良いと私は思っている。
「じゃあ、来年こそは頑張って」
「はい、頑張ります」
　叔母は姿勢を改め言うが、怪しいものだと思う。これも今に始まったことではないから、どうということもない。
「じゃ、これからバイトだから」
「はい、いってらっしゃい」
　そう言って、十も歳の離れていない叔母は笑って見送ってくれた。

　この後は夜までバイト、バイトが終わったらレポートを１つ仕上げて明日の朝イチで提出、それから自動車学校の迎えのバスが何時に来て、出来れば今年中に仮免合格して、来年は路上スタートと行きたいところ…。
　先の予定を組み立てながら、やっぱり無理だな、と思う。レポートが間に合わないのでも、仮免合格に自信がないわけでもない。叔母のようには生きられないな、と思ったのだ。
　今日は何時まで、今年中に来年から…どうやったって時間という決められた枠組みの中で、時間を気にすることなく時間に追われることなく生きることは難しい。だから叔母の、時間に無頓着という生き方は、一種の才能だと私は思う。同じ時間という枠組みの中に居ても、それに囚われない叔母は、ある意味でとても自由だ。
　叔母は、確かにとんでもない人だけれど、自由な素晴らしい日々を生きている。だからこそ、私が叔母にカレンダーを贈り続ける意味はあるのだ。年に一度、プレゼントを届けに訪ねている間だけは、叔母は私の時間に囚われるのだから。
　それだけで、私の日々は素晴らしい。

【終】
（2007.3.27）

ドッグイヤー

　平成１８年、戌年の春。
　同じフリーター同士それなりに、いや、かなりうまくいっていたと言っても良い彼女が定職に就いた。今は立派な社会人として、それこそ会う時間も作れない程に、バリバリと働いている。

　平成１８年、戌年の冬。
　飼い犬が死んだ。苦しまずに眠るように逝った。
　車のトランクに遺体を横たわらせ、小動物焼却場へ連れて行き、申請の書類を提出する作業はまるで事務仕事を片付けるような単調さで、お飾り程度の焼香をあげてようやく涙が出てきた程だった。けれど、その後に冷蔵庫だか冷凍庫だかに入れられるのを見て、一気に冷めた。興ざめというやつだ。
　それでも悲しかったし、いつもそこに居るのが当たり前だった存在が、唐突にそこから居なくなってしまうということに随分と戸惑った。フリーターだけに、落ち込む時間はたっぷりあったから、大いに落ち込み、人にも慰めを求めた。当然のように彼女にもそれを求め、「犬が死んだ。会いたい。慰めて」そうメールを送った。久しぶりのメールだったが、きっと返事はすぐに来るだろうと思った。彼女と犬の散歩に行ったことも何度もあったし、犬も彼女になついていたから、きっと彼女も一緒に悼んでくれると思ったのだ。
　しかし、予想に反して返事が来たのは３日後の深夜、一方的に待ち合わせ場所と時刻を告げる「明日12時に駅前ミスドで」の一行のみだった。

　そして今、お代わり自由のカフェオレの３杯目を頼んだ所に、彼女がやって来た。30分の遅刻だ。
「時間がないの」
　久しぶりの挨拶もなしに、彼女は時計を見ながら席に着いた。ブランド物のスーツが似合っていて、とても格好良い。くたびれたジャケットの下に、くたびれたＴシャツ姿の自分がひどく貧相に見えた。
「忙しそうだね」
「忙しいよ、こんな所でお茶してる暇もないくらいにね」
　忙しいと、思いやりというものが無くなるものなのだろうか。
「じゃあ何で来たの」
「そっちが会いたいって言ったんじゃない」
「それはそうだけど」
　本題はそこじゃない。いや、確かに会いたいとは言ったが、大事なのはもっと別のことだ。犬が死んだ。だから慰めて欲しい。本題は正にそこだろう。

　しかし、メールで言えることが、口では言えない。「慰めて」などと、とても言える雰囲気でもなかった。
「どうして遅れたの」
　結局、当たり障りのないことを口にしてしまう。
「仕事が長引いて」
「昼ちゃんと食べてるの」
「食べてるよ」
「何か頼めば」
「いらない」
　なんだそれ。待ち合わせに正午のミスドを指定しておいて、仕事が長引いたから30分遅れて来たのに、何もいらないって？　なんだ、それ――というのは口に出せなかった。彼女から、これ以上会話を長引かせたくないという意思を感じたからだ。
「･･･大変だったね」
　店に入って来たときも席に着いてからも、一度も目を合わせず、彼女はようやく本題に触れた。
「うん。大変だった」
　そう、大変だった。遺体を焼却場に運ぶ為に仕事には遅刻するし、仕事には身が入らないし、いつものクセで犬に話しかけそうになる度に自己嫌悪に陥るし、大変だった。大変なんだ。フリーターだからって大変じゃないなんてことはない。フリーターだって大変なんだ、色々と。それなりに――というのも、口には出せなかった。彼女が、何度も時計を気にしているからだ。忙しくなると、より一層時間に追われて過ごさなきゃならないらしい。
「忙しいのに、ごめん。行っていいよ」
「そう。じゃあ」
　結局、彼女はコートを脱ぐこともなく立ち去った。
　さよならの挨拶さえも無かった。

　平成１８年、戌年。年の瀬の雪が降りしきる深夜。
　いつか彼女がメールの返事を寄越したその時刻に、彼女の部屋の明かりが点いた。足音を忍ばせ、ドアを控えめにノックする。しばしの沈黙の後、ドアが開き、彼女が姿を見せた。
「こんな時間に何？」
　久しぶりの挨拶は、やっぱりなかった。
　まだ化粧を落としていない顔は、見るからに不機嫌そうだ。
「ちょっと」
「ちょっと？」
「入れてよ」
　鼻を鳴らして言うと、彼女は無言で招き入れてくれた。
　そのくらいの思いやりは、まだ残されているらしかった。

「ありがとう」
　だけど。
「さようなら」
　彼女は完全に沈黙した。

　そして今、彼女は車のトランクに横たわっている。
　いつか死んだ犬を横たわらせたのと同じ、あのトランクだ。あれから掃除もしていないから、きっと犬の毛が散っているだろう。

　犬と同じトランクに、犬の毛にまみれて、君は横たわっている。
　ねえ、君の１年は正にドッグイヤーだったね？

【ドッグイヤー】
犬は人間の約7倍の速さで成長し老いていくことから、通常７年で変化するような出来事が１年で忙しなく変化すること。
※かなりの自己解釈を含んでいます。

【終】
（2007.3.29）

ピアノガール２

　ピアノから人間の足が生えている。
　その足は、良く見ればスカートから伸びていて、学校指定の内履きを片方と紺色のハイソックスを覗かせピアノの下に横たわっている。正真正銘人間の足だ。
　土屋は音楽室の戸口に立ち尽くした。音楽室の鍵は確かに閉まっていた。たった今、土屋が鍵を開けたばかりだから間違いない。なのに、既に先客が居るとはどういうことだろう。
　土屋は、呑気にピアノの下に寝転がっている姿に、無性に腹が立ってきた。わざと足音を盛大に鳴らして、ピアノに歩み寄る。
「おい」
　不機嫌なのを隠しもせず、わざと尊大に呼びかけるが反応はない。本当に寝入っているのかと呆れた。と、脱ぎ捨てられた内履きの片方が目に入る。拾い上げると「菊池」と書いてあった。内履きのラインは赤だから、同学年だ。ということは、遠慮はいらないわけだ。これで叩き起こしてやろうか菊池さん――と、内心ほくそ笑んで、ピアノの下を覗き込む。
「･･･っ」
　覗き込んで、ぎょっとする。菊池なる女子生徒は、片腕で両目を覆い、唇を薄く開いて横たわっていた。その呼吸は少し荒い。泣いている、と思った。
　途端に、見てはいけないものを見てしまったような罪悪感に駆られる。それまで不機嫌だったのも、ちょっとした悪戯心も全部どこかに吹き飛んでしまった。途方に暮れ、困り果て、身動きすることさえ忘れた。
「･･･誰？」
　そうこうしているうちに、菊池が首だけを持ち上げて土屋を見た。
「そ、そっちこそ誰だよ。こんなところで何してるんだ」
　菊池は、泣いてはいなかった。つい先ほどまでの罪悪感はどこへやら、吹っ飛んだはずの不機嫌さを再び滲ませ、土屋は立ち上がった。
「眠ってた」
　ピアノの下から這い出す菊池を見下ろし、土屋は、やっぱりかよと舌打ちしそうになる。人の気など知りもしないで、菊池とやらは呑気に伸びなどしている。
「ピアノの下って気持ち良いんだよ。床って冷たいでしょ？　ピアノも冷たいから、上下挟まれると冷却効果抜群」
　聞いてもいないのに、菊池はベラベラと良く喋った。
「わたし、２組の菊池。そっちは何君？」
「５組･･･の、土屋」
　土屋の機嫌が悪いのも一向に構わない様子で、菊池はスカートの縁を直している。

「あれ、そういえば、ここ鍵かかってたでしょ？」
　ふと思いついた様に顔を上げた菊池に、土屋は職員室から借りて来た鍵を持ち上げて見せた。
「ああ、なるほど」
「そっちこそ、鍵無しでどうやって入ったんだよ」
「わたし？　わたしは、コレでーす」
　そう言って菊池は、得意気にヘアピンを掲げて見せた。
「意外と簡単に開くんだよ、これが」
「ああ、そう」
　聞かなきゃ良かったと土屋は思う。どうも菊池と話していると苛立つ。
「俺、ピアノの練習したいんだけど」
「あ、そうなんだ」
　それ以外に１人で音楽室に来る理由があるのか、と土屋は更に苛立つ。
　菊池は長い髪を頭の上でまとめながら、すたすたとピアノの周りを歩いている。出て行く素振りは見られない。
「だから･･･」
　出て行けよ、と言おうとしたまま、土屋は口を閉じれなくなった。菊池がピアノの前に陣取っていたのだ。
「わたしも、ちょうどピアノ弾こうとしてたところだったんだー」
「･･･寝てたんじゃなかったのかよ」
「えーと、精神統一も兼ねて？　みたいな」
　なにが「みたいな」だーーまんまとピアノを奪われ、土屋はもうどうにでもなれという気になった。この際だ、すぐ後に控えている式典での、国歌と校歌のピアノ伴奏でしくじったって良い。今のこの状況がさっさと過ぎ去ってくれれば、もう何でも良い。
「では、お先に一曲」
　深呼吸を一つ吐いて、菊池は弾く体勢に入る。
　さあ始まるかというところで、菊池がこちらを見るものだから、土屋はわけもなく慌てた。
「な、何だよ」
「その前に、内履き返して？」
「あ」
　なんとなく持ち続けていた内履きを持ち主に渡すと、「ありがとう」などと礼を言われ、土屋は妙に気恥ずかしさに襲われた。さっきまで自分は、この内履きで菊池を叩き起こしてやろうと思っていたんじゃなかったか。
「それでは、今度こそ」
　菊池の一言が、自己嫌悪に陥りかけていた土屋を我に返らせた。
　思いのほか真摯な面持ちでピアノに向かう菊池の、思いのほか白い指先に見惚れた土屋は、その指で奏でられた聞き慣れたメロディに、思わず拍子抜けしてしまった。
　それは、今まさに土屋が練習しようとしていた校歌だった。

「いつも式典で伴奏してくれる子が、もう嫌だって逃げちゃったのよ。だから土屋君、急で悪いんだけど、代わりにお願いできないかしら」と、楽譜と音楽室の鍵を渡されたのは、ほんの数分前のことだ。
「急で悪いんだけど」だって？　式典が始まるまでもう十分もなくて、すでに来客も集まっていて、それなのに最上階の音楽室まで練習に行けって？　冗談だろーーしかし、若い音楽教師にそう頼まれて、断れる土屋ではなかった。
　だから今、こうして土屋は音楽室に来ている。それが何故、自分は校歌を聞いているのだろう。
「いつも式典で伴奏してくれる子が、もう嫌だって逃げちゃった」だって？　逃げるくらいなら、最初から引き受けるなよ。音楽室に逃げ込んでピアノの下で寝るような奴が「もう嫌だ」だって？　そんな奴の代わりを引き受けて、振り回されてる俺はとんだピエロだ。用無しだーー土屋は、楽譜を床に叩き付けたくて仕様がなかった。
　そんな土屋を他所に、菊池は３番まである校歌をしっかり弾き切って「あー気持ちよかった！」と晴れ晴れとした笑顔で言った。

【終】

（2007.4.9）

アニマルパーク

「そもそもアニマルパークってなんだよ、動物園じゃだめなのかよ。なんでもかんでも英語にすりゃ良いってもんじゃないだろ、なあ」
　にっこり笑顔で風船を手にしたウサギが、顔に似合わない悪態を吐いた。
　私は、こちらに向かって来る家族に、すかさず「べにばなアニマルパークへようこそ！」と笑顔を向けた。ウサギも表面上は笑顔で子供に風船を手渡している。ただし、無言だ。ウサギは喋らない。というか、喋る必要はない。ここ、べにばなアニマルパークの入場口付近で、訪れた客を笑顔と風船で出迎える。それが私とウサギの仕事だ。愛想良く「アニマルパークへようこそ！」と客を迎えるお姉さんの役が私、寄って来る子供に風船を渡す役がウサギ。そういう役割分担だ。故に、ウサギは喋る必要がない。そもそもウサギは喋らない。不思議の国では喋るのだろうが、動物園で子供達を出迎えるウサギの着ぐるみが喋る必要は全くない。
「なあ、そう思わない？」
　客が途切れると、ウサギが再び話しかけてきた。誰も居なくなると、このウサギはすぐこれだ。私はいつも、着ぐるみ越しで声がこもって良く聞こえないということにして、ひたすら無視し続けている。ウサギはそれでも一向に構わないらしく、独りで喋り続けている。
「しかも、なんで動物園に来てまで着ぐるみのウサギさんに会わなきゃなんないんだよ。偽物に愛想振りまいて貰って嬉しいか？そもそもウサギさんは愛想なんか振りまかないっつの」
「ようこそ、べにばなアニマルパークへ！」
　私の掛け声に、親子連れがこちらを向いた。子供が「うさちゃん、風船ちょうだい」とウサギの元へ駆け寄って来る。ウサギは先程までの悪態を呑み込み、笑顔で風船を差し出した。子供は嬉しそうに「ありがとう」と笑って親元へと戻って行った。
「すみません」
　今度は他の親子連れが「写真、一緒に良いですか？」とカメラを手にやって来る。私はカメラを受け取って「はーい撮りますよー」と笑顔の親子とウサギを写真におさめた。
　まったくウサギときたら、あの笑顔の下ではどんな顔をしているのやら。
「ウサギ、バイバーイ」
　手を振り去って行く子供に手を振り返しながら、ウサギはぽつりと「呼び捨てすんな、ガキが」と言った。
　ウサギの悪態はいつものことだったが、今日は特にひどい。
　やんちゃな子供がウサギに飛びかかってこれば蹴りを入れ返し、生意気な子供が「風船寄越せよ」と手を伸ばせば、全ての風船を空に離してしまう有り様だ。
　これ以上無視を決め込むわけにもいかず、私は口を開いた。
「ウサギさん、真面目に仕事して下さいよ」
「はいはい、ウサギさんは真面目に仕事しますよ。なんたって今日で最後だかんな」

　あ、と思う。ウサギは、今日で着ぐるみ派遣の契約期間が終わるのだーー。

「夜の動物園って最高な！」
　ウサギは、閉園後の園内で思い切り伸びをした。
　今日で最後だからと、ウサギが夜の動物園を歩きたいと言いだした。何故か同僚のよしみで私も付き合うことになってしまったのだ。
「そうですか？」
「だってほら、動物独り占めできるだろ」
「まだ残ってる職員の方、たくさん居ますけど」
「…前から思ってたけど、あんたって冷たいよな」
「お客さんには優しいから良いんです」
「そうですか」
「そうですよ」
　夜の涼しい風が、疲れた身体を通り抜けていく。ウサギのネクタイがさらさらと揺れた。
　ウサギは、いつもワイシャツにネクタイ姿で仕事にやって来ていた。着ぐるみの中に入るときにはＴシャツにジャージ姿なのに、なんだってわざわざスーツで来る必要があるのだろう。
「ウサギさんって、何でいつもスーツ姿なんですか？」
「うん？　知りたい？」
「そりゃまあ、聞いたからには」
「好きなんだよね、動物が」
「…ああ」
　ウサギは動物以外にはひどい悪態を吐くくせに、ふと動物の名前を呼ぶときはいつも「さん」付けだった。あれは動物好きの表れだったのか。だが、動物が好きなこととスーツはどう繋がるのだろう。
「俺、いつも着ぐるみ姿だろ」
「それが仕事ですからね」
「うん。つまり俺は、動物相手に偽物姿を晒しているわけだ。これって、動物にとっちゃとんだ屈辱行為だとは思わないか」
　そうは思えなかったが、私は「そうですね」と先を促した。
「だろ？　だから、せめて着ぐるみを脱いでいるときには動物に敬意を払いたいんだ。そのための、これだ」と言って、ウサギはネクタイを引っ張った。
「へえ」
「何、聞いといて感想それだけ？」
いつの間にか、夜の散歩は終わりに近付いていた。最後に素直になってみるのも良いかと、私は一言だけ感想を述べる。
「スーツ姿のウサギさん、格好いいですよ」

ウサギは驚いたのか一瞬動作を止め、にやりと笑った。
「そりゃどうも」
従業員用出入口を抜けると、ウサギは園内を振り返り、目を細めた。
最後にもう一度だけ素直になるか、と、私はウサギと向き合った。
「お疲れ様でした、宇佐木さん」
宇佐木は短く「おう」と応えた。

【終】
（2007.5.18）

雨上がりの神さま

　雨が降りだした。

　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。

　雨粒が、地面やら水面やら葉っぱやらに当たって、ひどく嫌な音がする。
　辺りはどんどん暗くなり、雨はざんざか降りしきり、ちよ はその場を動けなくなってしまった。空を見上げてみるが、生い茂る木々や草が雨雲で覆われた空を隠してしまっている。そんなつもりはなかったのに、だいぶ奥まで入って来てしまったらしい。
　怖いし寒いし冷たいし濡れるし、ちよはもうどうして良いのか分からず、ただ呆っと立ち尽くしていた。

　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。

　その間も、雨は耳障りな音をたて降り続けている。
　髪と着物がぺたりと張り付いて、ちよ は濡女のようになってしまった。

　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
　ざんざんざん、わはははは。
　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
　ざんざかざん、可笑しな子供が居るな。

　――と、雨音に混ざって、おかしな声がする。
「だあれ？」
　辺りを見回すが、誰も居ない。雨音が聴かせた幻聴だろうか。

　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
　ざんざんざん、こっちじゃ、子供。
　ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。

　――いや、幻聴などではない。確かに、ちよ に語りかける声がした。きょろきょろと辺りを伺っていると、「こっちじゃ、こっちじゃ」とまた声がした。ちよ は声が聴こえる方へと歩いた。

　少し歩くと、沼が見えた。沼の縁には小さな鳥居と祠がある。
「こっちじゃ、こっちじゃ」
　どうやら声は、そこから聴こえてくるようだった。
　鳥居をくぐり、祠の前に立つ。
「よく来たな、子供」
　と、頭上から ちよ を迎える声が雨粒と共に落ちてきた。しかし、見上げても、目に入ってくる雨粒で視界がぼやけて木々の緑色しか見えない。
「迷子か？」
　ざざざ、と雨風に乗って地面に降り立ったのは、ちよ とそう変わらぬ年頃の少年だった。神主のような着物と被りものに、ちよ は祠の守人なのだろうかと首をかしげる。
「こんなところまで独りで来るとは、面妖な」
「あなただって」
「わしか？　わしは独りではない」
「他にも誰か居るの？」
　他にも迷子が居るのだと、ちよ は安心する。
「そこな沼には牛蛙がおる」
「牛？」
「蛙じゃ。牛のように鳴くから牛蛙」
「へえ、あなたが飼っているの？」
「いや、勝手に棲み着いてな。面白い声で鳴くからそのまま放っておる」
「ふうん…ねぇ、迷子はどこ？」
　牛蛙はともかく、他の迷子はどこに居るのだろう。あの小さな祠に隠れているのだろうかと、ちよ は少年の肩越しを覗き込む。
「何を言うておる。そこにおるではないか」
　すると少年は、ちよ を指差し笑った。
「迷子はお前独りじゃ。わしは迷子ではないぞ、ここに住んでおるのじゃからな」
「ここに住んでいるの？」
「そうじゃ」
「怖くない？」
「お前はどうじゃ」
「え？」
「怖いか」
　先程までは独りで途方に暮れていた ちよ だったが、今は不思議と怖くない。あれほど嫌だった雨音も、いつも間にか気にならなくなっていた。
　そう言うと、少年は「わははは！　やはり可笑しな子供だ」と笑った。
「雨音は嫌なのに、わしは怖くないのか。愉快、愉快じゃ」
　少年はひとり笑い転げている。ちよ には一体何がそんなに可笑しいのか分からない。

少年は一頻り笑い転げると、満足気に ちよ を見た。
「そんなお前に、そら、雨上がりをやろう」
少年がさっと右手を降ると、途端に雨が止んだ。
「うわあ･･･！」
「どうだ」
「あなたは神さまなの？　だから雨もいうことときくの？」
ちよ が尋ねると、少年はまた笑い転げた。ちよ が何を言っても、この少年には可笑しくて仕様がないらしい。
「そんな高尚なもんじゃあないが、そう思いたければ好きにしたらいい」
「ふうん？」
「さあ暗くなる前に行け、子供よ」
「はい。神さま、ありがとうございました」
お辞儀をして顔を上げると、そこにはもう神さまの姿はなかった。
代わりに、可笑しな歌が聴こえる。

ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
ざんざんざん、風邪を引くでないぞ。
ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。

その歌に混ざって、雨上がりの神さまの声がした。
ちよ は、一緒になって歌いながら家路に着く。

ざんざんざんざん、ざかざかざかざか。
ざんざんざんざん、ざかざかざかざか･･･

遠くで、牛のように鳴く蛙の声が聴こえた気がした。

【終】
（2007.6.1）

あとがき

【**2007**年版 あとがき】
わたしにとって「２５」は、少しだけ特別な数字です。
2007年8月25日は、こんなに「25」が揃う日はないだろうという日になりそうな気がしています。
そこで何かやりたいと思い、2006年8月25日から書き溜め、ブログで公開していたものを本にしてみました。
まとめてみたら、狙ったわけでもないいのに一貫性のようなものがあって、この１年を総括すると共に、区切りにもなりました。ありがとうございました！

2007年8月某日　とうた

【**2012**年版 あとがき】
この掌編集は、2007年に発行した再録集を電子書籍化したものです。
あれから５年が経ち、創作文ブログは創作文サイトとなり、あまり動きはないものの、ゆるゆると運営を続けています。
現在もサイトにも掲載しているものもあれば、もうお蔵入りになったものもあります。当時発行したそのまま、電子化しました。
上記あとがきでも書いていますが、１年間に書き溜めたものをまとめるという単純なコンセプトに、ブログ名の「ハローグッバイ」を冠しただけの再録集にしては、なんだか一貫性のようなものを感じています。この頃、自身にとってさまざまな別れがあったから、そう感じるのかもしれませんが。
これほど私小説に近いものを書いたのも、後にも先にもこの頃だけかもしれません。
そんなものを今更晒すのは気恥ずかしくもあり、私小説に近いかもしれないけれどあくまでこれは創作物だしと開き直る気持ちもあったり。５年という歳月が経ったからこそ、振り返ることができたのだと受け止めています。

ここまでお付き合いくださり、ありがとうございました。

2012年8月某日　とうた

ハローハロー、まだ見ぬ君へ。

ハローハロー、お元気ですか。

すべてが始まるこの言葉で、君を迎えたいと思うこの頃です。

ハローハロー、まだ見ぬ君へ。

ハローハロー。

（2007.8.25）

ハローグッバイ 2007

http://p.booklog.jp/book/54924

著者：とうた
著者プロフィール：http://p.booklog.jp/users/tuta121g/profile

感謝：松下 出

感想はこちらのコメントへ
http://p.booklog.jp/book/54924

ブクログ本棚へ入れる
http://booklog.jp/item/3/54924

電子書籍プラットフォーム：ブクログのパブー（http://p.booklog.jp/）
運営会社：株式会社ブクログ